



図1 過去の修理により白濁や光沢が生じている様子(橋姫)



図2-2 修理後



図2-1 彩色層の剥離、剥落、粉状化の様子(橋姫)



図3-2 修理後



図3-1 料紙の劣化(宿木二)



図4-2 修理後



図4-1 縦方向の強い折れと亀裂(横笛)



図5-2 修理後



図5-1 旧装以来残っている横方向の皺(横笛)



図6 台紙に生じた反り(柏木三)

〔修理報告〕

# 国宝源氏物語絵巻の修理について

はじめに

- 一 修理に至る経緯と修理前の状態
  - 二 修理の内容
  - 三 装丁の変更
  - 四 紙質検査等一覽
- おわりに

はじめに

徳川美術館が所蔵する国宝紙本著色源氏物語絵巻の保存修理事業は、平成二十四年（二〇二二）より約八年をかけて文化庁の指導の下、国庫補助事業として実施された。本稿では、まず修理事業に至る経緯として、修理前の損傷状態、損傷を改善するための修理内容について示す。また、今回の修理事業では、絵巻の詞書と絵の継ぎ部分を外して、台紙に貼り込んでいた修理前の状態を、卷子本に改装するという、所謂、文化財の現状変更の

国宝源氏物語絵巻の修理について

手続きを要する作業も行なった。この点についても言及して修理報告とするものである。

## 一 修理に至る経緯と修理前の状態

尾張徳川家に伝来した源氏物語絵巻は、三卷からなる卷子本であったが、昭和七年（一九三二）に詞書と絵の紙継ぎが外され、それぞれが台紙貼りの状態へと装丁の変更がなされていた。そして、台紙貼りの本紙は四周に田中親美氏（二八七五～一九七五）が製作した装飾性の高い料紙が付け廻されて、各面が桐製の平箱に納入されていた。そのため、国宝指定の名称に「絵巻」とあるものの、今般の修理が開始された時点での員数は詞書二十八面・絵十五面と記されていた。

卷子本を取り扱う際の巻き解きの作業は、経年劣化などによって柔軟性を失っている料紙には大きな負荷を掛けることになり、折れ傷が生じやすい。また、顔料を定着させている膠も、経年劣化により、殆どの彩色層は

岡 岩太郎

料紙への定着が不安定な状態となる。尾張徳川家に伝来した三巻の源氏物語絵巻も、多発した折れや、彩色層剥落の進行が懸念されたことなどを理由に、卷子本から台紙貼りへと、装丁の大幅な変更が実行されたのである。しかし、台紙貼りにすることによって、卷子本では発生しえないような損傷が時間の経過と共に徐々に発生し、継続的な公開活用が困難な状況となってきたことが、今回の解体修理実施に至った理由である。以下に発生していた代表的な損傷について、事業完了後に作成した修理報告書の内容をもとに列挙する。

### 絵の損傷

- ・画面全体の強化等を目的として、何らかの溶液を塗布した跡が光沢を帯び、斜光線と同じ方向から見ると白濁したように見えた(図1)。
- ・黴痕、もしくは黴そのものが料紙や絵具層の上に確認できた。
- ・粒子の細かな絵具層は、細かなプレート状のままでの剥離、剥落が多く認められた。緑青、群青等の粒子の粗い絵具層は、粉状化を起こして少しずつ剥落が進行していた(図2)。
- ・墨・赤(臙脂色)・濃黄・白(特に顔)の絵具層には、縮緬状や鱗状の剥離が多く認められた。これらは過去に塗布されたものが厚い膜のように残留していることが原因と考えられ、絵具層だけでなく下の料紙をも引っぱり上げている箇所が多く認められた(1)。
- ・緑青・群青・銀の酸化による料紙の劣化が甚だしかった。料紙は茶褐色化してもろくなり、亀裂や料紙表面の剥離、剥落が随所に認められた(図3)。
- ・料紙の欠失は「関屋」に多く認められる。一方、他の絵においては、目

立った欠失はあまり認められなかった。

強い縦方向の折れ跡が随所にあり、一部では、折れから亀裂へと進行しているのが認められた(図4)。

折れ跡の他に多くの皺が認められたが、これらは卷子本であった過去の修理時に、皺を伸ばさなまま裏打ちを施したために生じた可能性が高い。皺の多寡は本紙によって差があり、卷子本時の三巻の内甲巻(蓬生・関屋・竹河一・二・橋姫)・乙巻(柏木一・二・三・横笛)に多く認められ、丙巻(早蕨・宿木一・二・三・東屋一・二・竹河二の詞書一紙)には殆ど認められなかった。

### 詞書の損傷

- ・料紙は全て色紙大で、一紙毎に異なった装飾を施している。下地には、染紙・胡粉下地・雲母引・胡粉の上に雲母を引いたもの・雲母の型摺り・何も施していないと思われるものがあり、地色の染めの褪色は顕著であった。
- ・絵と同様に画面全体に何かを塗布した跡が光沢を帯び、斜光線と同じ方向から見ると白濁したように見えた。これは墨や箔の上にも見られ、層状に残っている部分には縮緬状の細かな皺が認められた。
- ・黴痕、もしくは黴そのものが随所に認められた。この部分には光沢は感じられなかった。
- ・強い縦方向の折れ跡が随所にあった。また、折れ跡の他に、多くの皺が確認できた。これは、卷子本時に実施された修理において、生じていた皺を適切に伸ばさなまま裏打ちを施したことが一因であると考えられる。皺の多寡は本紙によって差があり、卷子本時の甲巻に多く認めら

れ、乙巻・丙巻には殆ど認められなかった(図5)。

・卷子本時の巻頭にあった料紙は、浸水もしくは湿度の高い環境にあったために起こった汚れ・上擦れ・破れ・欠失が多く認められ、他の料紙に比べ損傷が甚大であった。

・料紙表面の剥離や欠失、料紙の欠失や虫損が部分的に認められた。

・胡粉下地・雲母引・雲母型摺りには剥落が認められ、粉状化していた。

・それらの上に書かれた墨は下地ごとの剥落が見られた。

・金銀箔は、上擦れなどで薄くなっているものが多く、縮れが認められるものもあり、墨と同様に、料紙との接着は脆弱であった。特に銀箔の劣化は顕著であった。

## 装丁の損傷

・絵と詞書のそれぞれの天地端には、全紙に金箔を押しした料紙による足し紙と、寸法調整のための料紙(十六段の内九段)が付けられていた。これらの足し紙と本紙料紙の伸縮の度合いがあつておらず、皺や波打ちなど原因となっていた。

・一面ごとに桐製平箱に納められていたが、経年により生じた狂いのためか、台紙寸法(特に縦寸法)が箱の内法寸法より若干大きく、少し押し込まれて収納されている面が多かった。そのため、台紙に周囲から力が加わり、台紙全体が若干の弓形に反っていた。この反りは本紙料紙に常に緊張を生じさせることとなり、亀裂や剥離が起きやすくなる一因となっていたと推測できた(図6)。

以上のような様々な損傷が十五面の絵と二十八面の詞書のそれぞれに程

度の多少はあるものの、共通して確認できた。台紙貼りを解体して、本紙を支える裏打紙を取り除き、健全な裏打紙へと更新することによる構造補強と、膠水溶液による彩色層の強化を中心とした修理設計を平成二十三年度に策定した。設計当初は、田中親美氏の手による装飾料紙は再使用して、台紙の素材を再検討するなど、修理前の装丁形態を修理後にも踏襲することにしていた。しかし、解体作業を進めるに従って、修理後は台紙貼りではなく、卷子本に仕立てるように設計を変更することとなった。この経緯については後で詳説する。

## 二 修理の内容

今回の修理事業は平成二十四年度(二〇二二)から平成二十七年度の四ヶ年を第一期、平成二十八年度(二〇二六)から令和元年度(二〇一九)までの四ヶ年を第二期とした。第一期は絵十五面と詞書三面についての入念な状態調査や記録、彩色層の強化や汚れの除去などの作業を実施した。以下に第一期の修理の内容に則り、実施が完了した修理工程を記す。

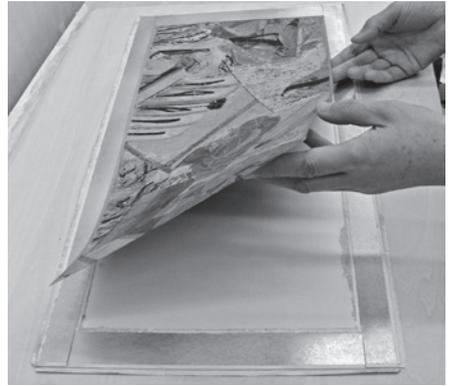
一、修理前調査…詳細な写真、損傷、装丁の記録を行なった。

二、解体…台紙貼装から本紙を外した(挿図1)。

三、修理中調査…卷子本時の装丁の記録、本紙の透過光写真撮影等を行なった。

四、剥落止め…解体前、解体後、汚れ除去後、肌裏打後等、工程に沿って絵具層と料紙の入念な剥落・剥離止めを行なった(挿図2)。

五、裏面処置…総裏紙、金地天地足し紙、寸法調整の料紙を除去した。



挿図1 台紙の解体



挿図2 剥落止め

- 六、汚れ除去…浄化水による汚れ除去をし、仮裏打ちを行なった。
- 七、修理中調査…透過光等で詳細な欠失・亀裂箇所等の損傷地図を作成した。
- 八、除去確認…損傷地図に基づき、旧補修紙の除去を検討した。
- 九、補修紙作製…本紙料紙の詳細な紙調査をし、それに基づく補修紙を作製した。
- 十、表打ち…布海苔及びレーヨン紙にて本紙表面に表打ちを行なった。
- 十一、肌裏紙と補修紙除去…本紙料紙や絵具層に負荷の掛からないよう少しずつ除去を行なった。
- 十二、裏面調査…本紙料紙裏面の詳細な記録を残した。
- 十三、補紙…旧補修紙を除去した箇所に、新しく作製した補修紙を補填し

た。

十四、足し紙調整…金地料紙・寸法調整の料紙の新調もしくは再使用できるように調整した。

十五、肌裏打ち…楮紙(美濃紙)と小麦澱粉糊(新糊)にて肌裏打ちを行なった。更に安定した状態にする為、もう一層楮紙にて裏打ちを行なった。

十六、点検…本紙が安定した状態で、再度絵具層と料紙の念入りな点検を行なった。

十七、補彩…新しく施した補修紙に周囲の地色を基調とした補彩を行なった。

以上の事業内容のうち、第一期である平成二十四年度は、絵五面〔蓬生〕・〔柏木一〕・〔橋姫〕・〔宿木一〕・〔宿木三〕について一から八、詞書三面〔蓬生〕第二面・〔柏木一〕第一面・〔宿木一〕について一から三の工程を実施した。

続く平成二十五年度は、右記の絵五面について九から十七の工程と、詞三面について四から十三の工程を完了した。加えて、別の絵五面〔柏木三〕・〔竹河一〕・〔東屋一〕・〔関屋〕・〔宿木二〕について工程の一から十三を行なった。

平成二十六年度は、先年度から加わった絵五面について工程の十四から十七と詞書三面の十四から十七の施工を完了した。そして最終年度は平成二十五年に続いて絵五面の工程十四から十七を実施した。

次に第二期は第一期の事業に引き続き、最終的に、各段を卷子本に組み立てるまでを事業とした。第二期の事業内容を第一期と同様に記す。

絵十五面

一、点検、記録…本紙を収納箱から取り出し、本紙の状態を点検、記録した。

二、仮裏除去…本紙保護のための仮裏を除去した。

三、増裏打ち…美栖紙にて増裏打ちを行なった。

四、折れ伏せ入れ…本紙の折れが生じている箇所等に折れ伏せ入れを行なった。

五、中裏打ち…美栖紙にて中裏打ちを行なった。

六、総裏打ち…混合紙にて総裏打ちを行なった。

詞書二十八面

七、修理前調査…修理前の詳細な写真、損傷、装丁の記録を行なった。

八、修理中調査…卷子本時の装丁の記録、本紙の透過光写真撮影を行なった。

九、裏面処置…肌裏紙以外の総裏紙、天地足し紙等の本紙に付されたものを取り外した。

十、汚れ除去…汚れの除去を行内、仮裏打ちをして本紙を安定させた。

十一、剥落止め…墨書、料紙の装飾へ剥落止めを行なった。

十二、修理中調査…本紙料紙の状態を記録した。

十三、補修紙作製…本紙料紙の紙質調査に基づき、補修紙を作製した。

十四、表打ち…表打ちを行い、本紙表面を保護した。

十五、後補材除去…肌裏紙及び保存に適さないと判断された後補材を除去した。

十六、裏面調査…本紙料紙裏面の状態を記録した。

十七、補紙…本紙欠損箇所<sup>(1)</sup>に補修紙を施した。

十八、天地保護…本紙の上下に補修紙を用いて足し紙を施した。

十九、肌裏打ち…適切な厚み、色味の薄美濃紙を選定し、肌裏打ちを行なった。

二十、増裏打ち…美栖紙にて増裏打ちを行なった。

二十一、折れ伏せ入れ…本紙の折れが生じている箇所等に折れ伏せ入れを行なった。

二十二、中裏打ち…美栖紙にて中裏打ちを行なった。

二十三、総裏打ち…混合紙にて総裏打ちを行なった。

但し詞書二十八面のうち<sup>(2)</sup>三面〔蓬生〕詞書第二紙・〔柏木〕詞書第一紙・〔宿木〕については第一期にて七から十九までは施工済みである。

二十四、本紙継ぎ…処置の完了している絵と詞書を繋いだ〔挿図3〕。

二十五、仮張り乾燥…仮張りに表張りを行ない、十分に乾燥させた。

二十六、追加的彩色層強化…絵具層の状態を点検し、必要箇所<sup>(3)</sup>に剥落止めを行なった。

二十七、補彩…絵及び詞書の補修紙を施した部分に補彩をした。

二十八、仮張り乾燥…仮張りに裏張りを行ない、十分に乾燥させた。

二十九、表紙と見返しの作成…表紙及び見返しは新調し、肌裏を打ち、表紙の形に貼り合わせてから仮張りし、十分に乾燥させた。

三十、組み立て…新調した軸首・軸木・八双・表紙・紐・軸巻紙を取り付け、卷子本に仕立てた。

三十一、収納具新調…桐製太巻添軸・桐製屋郎箱を各巻に新調して本紙を納入した。



挿図3 詞書と絵を繋ぐ

以上の事業内容にて平成二十八年度は「蓬生」・「竹河二」・「宿木三」の一から三十一の工程を実施した。続く平成二十九年年度には「関屋」・「絵合」<sup>(4)</sup>・「柏木一」・「早蕨」・「東屋一」・平成三十年年度には「柏木二」・「柏木三」・「宿木一」・「東屋二」・令和元年度には「横笛」・「竹河一」・「橋姫」・「宿木二」について工程の一から三十一までを完了した。

二期八年にわたる修理事業によって、汚れの除去や彩色層の強化、裏打紙の更新による構造補強等の必要とされる全ての修理工程が完結し、絵十五面、詞書二十八面という員数の源氏物語絵巻は、十五巻の卷子本へとその姿を変更した。

### 三 装丁の変更

平成二十三年度(二〇一一)に行なった最初の修理設計の時点では、発生した損傷を改善するために裏打紙や台紙といった本紙料紙を支える構造体を更新はするものの、原則的に台紙貼りの装丁については、修理後も継承するという計画であった。しかし、事業を開始した平成二十四年度に台紙貼りを解体して、一旦、本紙料紙の四周に配されている田中親美氏による美麗な装飾料紙を取り除いてみると、詞書と絵の両方において、その見え方や印象に大きな変化があった。このような印象変化は、修理現場においてのみ体感するところであり、以下は極めて主観的な説明に終始してしまふことをご理解いただきたい。

平安時代に成立した物語絵巻の華奢で繊細な印象は、四周の装飾料紙が付された状態では、十分に感じ取ることができないという現実を解体作業を通じて感得するに至ったのである。小さな面積に緻密に且つバリエーション豊かに施された金銀の砂子や野毛などの装飾と、仮名文字の優雅さを有する詞書や、物語の一場面を情感豊かに、また細部に至るまで手を抜くことなく描かれた絵が、まさに我が国が誇る国宝のひとつであることから、解体という作業後に痛感させられた。また、本紙料紙だけの状態にしてから、各段に対応する詞書と絵を並べて置いてみると、そもそもは卷子本であったということを、想像以上に強く観る者に作品が訴えかけてくるかのようなであった。詞書と絵を並べた瞬間に、直近の一世紀に満たない期間は個別に保存されていたにも関わらず、再び詞書と絵がそもそもは繋がっていたことを示すように、波動あるいはエネルギーとも表現できる

ようなものが詞書と絵の双方の料紙の間を行き来しているかのような力強さが蘇ってきた。これはおそらく、極めて長い時間にわたって繋がっていたことよって、本紙料紙に積み重なった古色や、微細な皺の痕跡などが詞書と絵の繋ぎ目を跨いで連続した結果、そのような印象を与えているのではないかと推察するところである。このような経験は、様々な絵巻修理事業において、錯簡を修正したり、断簡となつて久しい本紙料紙が、再びそもそもあつた位置関係へと復元されるなどの機会を通じて体感することがある。

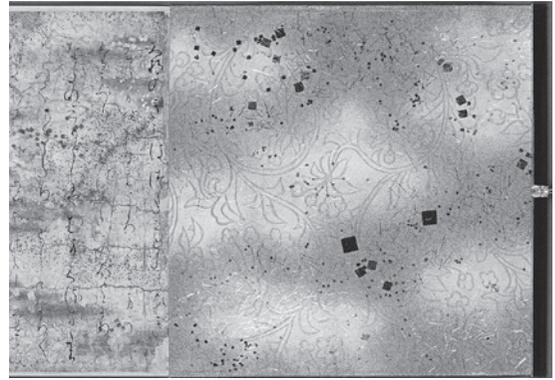
徳川美術館や文化庁の担当者と協議の結果、当初の台紙貼りに戻すという設計内容を再考することとなり、卷子本に仕上げる仕様への設計変更をすることにした。卷子本に仕立てるならば、台紙貼りにされる前の構成に做つて復元的に三巻とする、あるいは全てを繋いだ一巻の絵巻とすることも技術的には可能であつた。しかし、今回の修理では、各段を一巻として、全十五巻に仕立てることとした。これは、三巻仕立てや一巻仕立てよりも取り扱い時の安全性や、公開活用を視野に入れた合理性を考慮して定められた方針である。

どのような巻数に仕上げるにしても、台紙貼りの状態で国宝に指定されている文化財の形態を、修理を機に卷子本にするためには、現状変更の継続を経なければならぬ。現状変更は、文化財そのものの姿が修理の機会などにも変わることに繋がり得る行為であるために、極めて抑制的に且つ慎重にその妥当性が検討される場所である。絵巻修理における現状変更について朝賀浩氏が明快に説明しているので、その一部を以下に引用する。

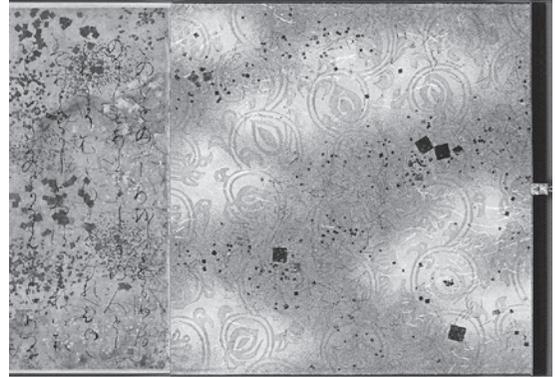
絵巻修理に伴って現状変更の許可が必要な場合は、主として作品の

形態に変更が生じる場合である。たとえば卷子の錯簡を訂正する場合、長大な一巻の卷子を保存上の理由により複数巻に分けて仕立てる場合、卷子を掛軸に変更する場合、襖の貼込み位置を大きく変更する場合などで、これらのうち現状変更の行為の結果によっては名称変更や員数変更を伴う場合もある。これらの中には、現状変更が妥当であるかどうか、第一専門調査会の絵画・彫刻部会で慎重な調査・審議を行なつて判断が下される。現状変更が認められる条件としては、変更行為が作品の文化財としての価値(芸術的価値及び学術的価値)を損ねたり軽減させたりしないことを原則とし、作品の鑑賞性や文化史的意義の回復に有効であること、及び将来にわたる保存管理上の安全性への配慮を十分に考慮することを確認しなければならぬ<sup>(5)</sup>。これらの条件を複合的、総合的に判断することが必要となる。

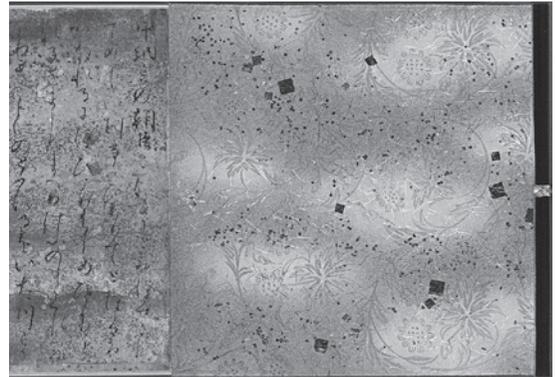
源氏物語絵巻は、平成二十六年に現状変更が許可され、十五巻の卷子本とすることが認められた。これにより、本紙に過度な負担をかけることなく適宜、公開すべき箇所を展開するのに必要最小限の取り扱いが可能となった。修理後の十五巻という構成は、本作が伝来してきた長い歴史の中で一度も装丁されたことのない姿であると考えられるが、卷子本にするということは、「鑑賞性や文化史的意義の回復に有効」であつて、十五巻仕立てとすることについては、朝賀氏の説明にある「保存管理上の安全性への配慮」をしているという点に正当性があると言えるであろう。今回の修理事業にて実施した現状変更は、「オリジナルの素材を将来にわたり保存していくこと、それによって維持される絵巻表現の本来的価値を回復することの双方を目指す<sup>(6)</sup>」という現代の絵巻修理の理念に基づく方針なのである。



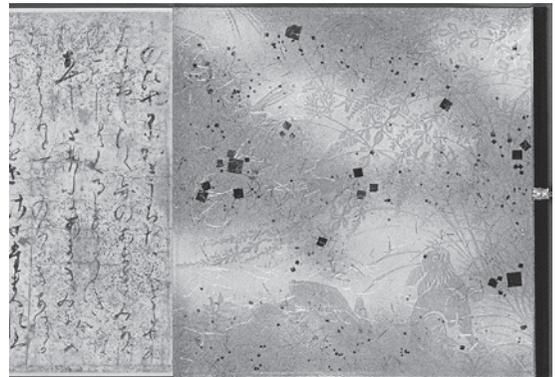
挿図4-1 新調見返し 柏木二



挿図4-2 新調見返し 柏木三



挿図4-3 新調見返し 宿木一

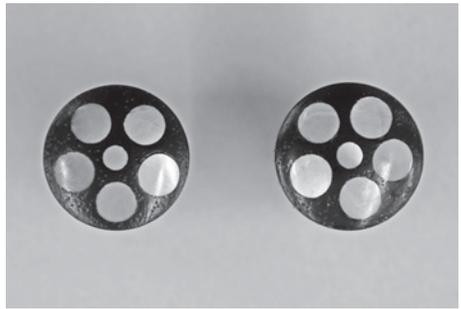


挿図4-4 新調見返し 東屋二

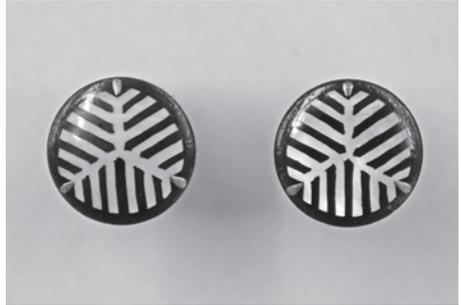
また、十五巻の卷子本に仕立てるために、国宝の卷子本にふさわしい表紙と見返し、そして軸首を新調しなければならなかった。新調した表紙の藍によって染めて仕上げた。この裂地の製作と染めには選定保存技術保持者の技術が活かされている。見返しについては、四辻秀紀徳川美術館学芸部長(当時)の紹介で、藤原彰子氏が復元した版木(表1)を借用して、金と白金の砂子を撒いてから摺り出し加工を施し、野毛などをあしらって仕上げた(挿図4)。十五巻の全てに違う文様を検討して摺り出した。また、螺鈿軸は北村昭斎氏と室瀬和美氏という漆芸分野を代表する重要無形文化財保持者による分担製作となり(表2)、各段の物語や絵画表現にインスパイアされた螺鈿の意匠が両氏より提案された(挿図5)。また、十五巻は保存

性に配慮してそれぞれに桐製の太巻添え軸と屋郎箱を新調した。製作は選定保存技術者の前田友斎氏の工房によるものである。

以上のように、源氏物語絵巻の修理は、修理実務を担う装演師だけでなく、重要無形文化財保持者や、さまざまな分野の選定保存技術保持者による卓越した技術によって支えられたのである。本修理事業において用いられた主たる修理材料の名称とその製作者等を一覧として(表3)に示す。



挿図5-1 新調軸首 柏木二(北村昭斎氏作)



挿図5-2 新調軸首 柏木三(北村昭斎氏作)



挿図5-3 新調軸首 東屋二(室瀬和美氏作)

#### 四 紙質検査等一覧

昭和五十年代以降、絵巻や古文書などの紙本文化財については、解体修理等の機会に、C染色液を用いた紙質検査を実施してきた。中世の製作と考えられる絵巻物については詞書と絵の料紙には、比較的、楮の裁断繊維を原材料とし、打ち紙加工を施した料紙が用いられることが多い印象があるのは筆者だけではないであろう。しかし、今回はそれとは異なる検査結果を見出したことは極めて興味深い。詞書に用いられている料紙については雁皮を主体としている傾向があり、絵に用いられている料紙については楮を主体としており、雁皮や三楮が混合されている場合もあった。また、詞書と絵の両方の料紙からは填料として米粉が確認された。米粉を混ぜ込むことによって、紙の白さを増す効果がある。

国宝 源氏物語絵巻の修理について

#### おわりに

絵巻の製作年代から用いられる料紙の傾向を明確に示すほどの紙質検査数量が集積されたようなデータは、現時点では管見のところない。しかし、筆者の経験からは、詞書と絵で明らかに紙質の異なるものが見られて一巻の卷子本となっている事例は決して多く見受けられることではない。今後も修理の機会等によって裝潢修理現場で絵巻等の料紙の繊維調査結果が蓄積され、ひとまとまりの情報として閲覧できるようにする環境が整うことを期待したい。本修理事業における検査の結果を一覧として、修理前後の寸法と併せて(表4)にまとめておく。

筆者が徳川美術館にて源氏物語絵巻を初めてじっくりと鑑賞したのは今から三十年以上前の学生時代のことであった。詞書に用いられた料紙の美しさや、非常に精緻な線描や想像以上に彩色が厚く施されていたことに驚きながら感動したことは今でも忘れることはできない。偶然に会場におられた柳澤孝先生から絵の筆者は何人に分類できると思うかとの問いかけを思いがけずを受けて、緊張のあまり何も答えられず、帰りの新幹線の中で自分の勉強不足を恥じつつも、国宝である所以を噛み締めたのであった。時を経て、その源氏物語絵巻の修理を担うことができたのは、裝潢修理の専門家として非常に幸運なことであった。また、九十年ぶりに卷子本の姿にする、現状変更という作業に関わったことは、現状維持修理の原則を守

りながら、常に抑制的に進める文化財修理の難しさを考える機会となった。巻き解きの作業を繰り返さなければならぬ卷子本や掛軸装の装丁は、折れや表面の擦れを警戒するという理由から台紙貼りや、パネル貼りへと改装された状態で伝来している絵画は、特に欧米に目を向けると決して珍しくはない。取り扱いの簡便さから、折れ傷や表面の摩擦の危険性がないということもあって、巻かないことの利点の方が大きいという意見も耳にすることがある。しかし、我が国で連続と引き継がれている卷子本や掛軸装といった装丁方法には、巻くことによって光や空気への曝露を必要最小限とすることができるという長所がある。巻いて保存することによって宝物が信じられないほど健全な状態で伝来している例は正倉院文書などを見ることも明らかである。この巻くべきか巻かざるべきかという問題は、どちらかが圧倒的に優れているという単純な比較で結論づけることはできない。文化財本体の劣化状態やそれを改善することのできる修理技術の有無など、文化財を取り巻く状況によって、どのような装丁方法を選択すべきなのかは変わってくるはずである。損傷が進行した源氏物語絵巻の継ぎを丁寧に剥がして、それぞれを台紙に貼って箱に収めるという決断を熟慮の末に決定されたことは、約九十年前の当時としては、間違いない方向性であったと思われる。しかし、経年の劣化は自然の理であり、不可避であるために一般の解体修理となつたわけである。今回の修理では卷子本に仕立てるために必須の裏打紙の更新による構造補強や緻密な剥落止め技術などといった、特に直近の数十年で高度化した技術がなければ実現できなかつたと考える。元来、掛軸装とは、床の間や梁にかけて鑑賞するための装丁方法であり、卷子本は手元で少しづつ展開しながら鑑賞するための装丁方法である。製作当初あるいは長い伝来の中で引き継がれてきた装

丁方法も含めて未来へ継承することにより、源氏物語絵巻の絵巻としての見え方を修理後の公開によって多くの人々に感じ取っていただけるお手伝いを、修理という事業を通じてできたとするならば、修理を担当した工房の代表者として至上の喜びである。

最後になったが修理の実施に当たってご指導・御協力をいただいた全ての方に感謝の意を表し、修理報告の筆を擱く。

## 註

(1) 修理作業を担当した岡墨光堂修復部大山昭子部長(当時)は、過去の修理によって彩色層の表面に塗布された素材について、膠ではなく、蒟蒻のような粘性のある材料であった印象があるとのコメントを残している。強い収縮力で彩色層や料紙を剥離させていたこの材料については、一箇所ずつ時間をかけて少量の水分によってじつくりと膨潤させることによって可能な限り除去をし、膠水溶液による彩色層の安定化をすることができた。

(2) 第一期で必要な剥落止め作業は実施しているが、第二期の作業においても水分の浸潤の機会があるため、念の為、必要十分な彩色層の安定化を目的として剥落止めの工程を再度、実施することとした。

(3) 絵と詞書が連結された時の微妙な印象変化が予測できたので、第一期で実施した補彩は比較的控え目な仕上がりに留めておいた。最終的な各段の姿が明白になる第二期の補彩にて補彩の完成度を高めるため、各期において補彩の工程を実施した。

(4) 「絵合」については詞書のみが伝来しており、卷子本に仕立てるには十分な長さを有していなかった。この「絵合」はそもそも、「閨屋」に続く段であるため、今回の修理では、協議の結果、詞書と絵が繋げられた「閨屋」の絵の後に「絵合」の詞書を繋いで一巻とした。

(5) 朝賀浩「文化財修理と現状変更―国宝「檜図屏風」の解体修理」(東京国立博物館編『MUSEUM』六五四、二〇一五年)。

(6) 朝賀浩「十王図」の解体修理〔重要文化財修理完成記念 十王図〕、神奈川県立博物館、二〇二一年。

(株式会社岡墨光堂 代表取締役)

表1 見返し 版木一覧

		西田継男											製作者												
岡興造		藤原彰子											所蔵者												
													使用巻	文様											
早蕨	小菊文	東屋二	秋草兔図	東屋一	浮線綾文	宿木三	秋草鹿図	宿木二	唐花草文	宿木一	野菊唐草文	橋姫	瓜図	竹河二	花文	竹河一	梅薄図	横笛	夾竹桃折枝図	柏木三	重ね唐草文	柏木二	桜唐草文	蓬生	獅子鎖丸唐草文
		関屋・総合	波文	柏木一	蓮唐草文																				

表2 軸首 覧

室瀬和美					北村昭斎					製作者	使用巻	文様			
東屋二	東屋一	宿木三	宿木二	宿木一	早蕨	橋姫	竹河二	竹河一	横笛	柏木三	柏木二	柏木一	関屋・絵合	蓬生	蕨文
扇文	菱花文	菊文	菱花文	菱花文	蕨文	撥に月文	桜文	丸に菱花文	亀甲菱花文	松葉文	梅文	菱花文	片輪車文		

表3 修理使用材料・材料製作者等一覧表

	材料名	製作者
軸巻紙	楮紙	江潤栄賞
総裏紙	混合紙(雁皮・楮)	山口壮八
中裏紙	楮紙(美栖紙)	上窪良二
折れ伏せ紙	楮紙(美濃紙)	太田弥八郎
増裏紙	楮紙(美栖紙)	上窪良二
二枚目裏打紙	楮紙(美濃紙)	鈴木竹久
肌裏紙	楮紙	江潤栄賞
補修紙	詞…雁皮(米粉入り) 絵…楮紙(裁断繊維 米粉入り)	岡墨光堂
保存箱等	太巻添軸・桐製屋郎箱	前田友斎
紐	萌黄薄茶畝組紐	多田牧子
軸首	黒檀に螺鈿(一覧は別表参照)	北村昭斎 室瀬和美
見返し	混合紙(雁皮・楮) 白金・金砂子磨き出し料紙	山口壮八 岡墨光堂
表紙裂	藍地無地羅	織…廣信織物 染…紺九

表4 修復前後の寸法・紙質検査等一覧

※寸法は、本紙のみ。ただし詞書は、切箔料紙の足し紙を含む。  
 ※料紙調査は、高知県立紙産業技術センター調べ。繊維長は楮のもの。  
 ※料紙の質目・糸目については、いずれも認められなかった。  
 ※修理後は卷子本に改まったため、一紙ごとに第一紙、第二紙・・・と表記し、修理前の表記も修理後に合わせた。  
 ※寸法は、本紙のみ。ただし詞書は、切箔料紙の足し紙を含む。  
 ※修理後の一巻ごとの縦寸法(天地足し紙を含む)は、表中「縦」に記した。  
 ※本紙全長には見返し、軸巻きを含まない。  
 ※料紙調査は、高知県立紙産業技術センター調べ。  
 ※料紙の質目については、いずれも認められなかった。  
 ※料紙の糸目については詞の一部に認められ、明瞭に読み取れたのは「蓬生」第二紙(詞書)のみで、約二七・三ミリメートル間隔であった。

絵	詞書								修理前		修理後		料紙調査	填料	繊維長(mm)
	丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)	紙繊維組成・割合(%)	丈(cm)	幅(cm)								
蓬生	詞書一	二二・〇	四七・四	二二・二	四八・五	雁皮一〇〇	米粉	一〇二							
	詞書二					雁皮一〇〇	米粉								
柏木一	詞書一	二二・九	四六・五	二二・一	四七・三	雁皮一〇〇	米粉	一〇二							
	詞書二					雁皮一〇〇	米粉								
宿木一	詞書一	二二・九	四八・五	二二・〇	四九・一	雁皮一〇〇	米粉	一〇二							
	詞書二					雁皮一〇〇	米粉								
蓬生	詞書一	二二・五	四八・二	二二・五	四八・八	雁皮一〇〇	米粉	一〇二							
	詞書二					雁皮一〇〇	米粉								
関屋		二二・五	四七・二	二二・五	四七・七	楮六〇、雁皮四〇	米粉	一〇二							
柏木一		二二・九	四八・三	二二・九	四八・五	楮一〇〇	米粉								
柏木二		二二・九	四八・五	二二・〇	四八・八	楮一〇〇、三椏(痕跡)	米粉	一〇三							

絵																
										修理前		修理後		料紙調査 紙繊維組成・割合(%)	埴料	繊維長(mm)
										丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)			
東屋二	二一・四	四八・一	二一・六	四八・八	楮一〇〇、三桎(痕跡)	米粉	一〇三	東屋一	二一・四	三九・一	二一・六	三九・六	楮七五、三桎三五	米粉	一〇三	
宿木三	二一・五	四八・六	二一・五	四九・〇	楮五〇、三桎五〇	米粉	一〇二	宿木二	二一・五	三七・九	二一・六	三八・一	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇三	
宿木一	二一・六	三八・二	二一・六	三八・二	楮五〇、三桎五〇	米粉	一〇二	早蕨	二一・四	三九・二	二一・五	三九・六	楮七五、三桎一五、雁皮一〇	米粉	一〇三	
橋姫	二二・一	四八・二	二二・一	四八・五	楮九〇、三桎一〇、三桎二〇	米粉	一〇二	竹河二	二二・〇	四八・二	二二・一	四八・七	楮八〇、三桎二〇	米粉	一〇二	
竹河一	二二・〇	四八・一	二二・一	四八・八	楮一〇〇	無し	一〇三	横笛	二一・九	三八・六	二二・〇	三九・〇	楮八〇、三桎二〇	米粉	一〇二	
柏木三	二二・九	四八・二	二二・九	四八・五	楮一〇〇	米粉	一〇二	東屋二	二一・四	四八・一	二一・六	四八・八	楮一〇〇、三桎(痕跡)	米粉	一〇三	

竹河二										蓬生												
第七紙(詞書)	第六紙(詞書)	第五紙(詞書)	第四紙(詞書)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第五紙(絵)	第四紙(詞書)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦			
二二・〇	二二・九	二二・〇	二二・八	二二・〇	二二・〇	二二・七	/	/	/	/	/	二二・五	二二・二	二二・二	二二・九	二二・九	/	/	/	丈(cm)	修理前(額装)	
二四・一	二三・七	二三・九	二三・六	二三・二	一三三・五	二二・七	/	/	/	/	四八・八	二四・七	二三・八	二三・二	二三・二	二三・二	/	/	/	幅(cm)	修理後(卷子装)	
二二・〇	二二・一	二二・一	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・七	二二・七	二二・七	二二・六	/	二二・六	二二・五	二二・〇	二二・二	二二・一	二二・一	二二・七	二二・七	二二・六	丈(cm)	料紙調査	
二四・二	二四・一	二四・一	二四・〇	二三・五	一三三・八	二二・一	二二・一	二二・七	一四三・二	/	三六・二	四八・八	二四・七	二三・六	二三・五	二二・六	二二・一	二二・七	二二・六	幅(cm)	紙繊維組成・割合(%)	
雁皮二〇〇	/	/	/	/	楮一〇〇	雁皮二〇〇	雁皮二〇〇	雁皮二〇〇	雁皮二〇〇	雁皮二〇〇	/	/	/	米紙調査	米紙調査							
米粉	/	/	/	/	米粉	米粉	米粉		米粉		/	/	/	填料	填料							
一〇三	/	/	/	/	一〇二			一〇三、糸目二七・三	一〇三		/	/	/	繊維長・その他(mm)	繊維長・その他(mm)							

		修理前(額装)		修理後(卷子装)		料紙調査		
		丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)	紙繊維組成・割合(%)	填料	繊維長・その他(mm)
竹河二		第八紙(詞書)	二二・〇	二三・八	二二・一	二四・二	米粉	一〇三
		第九紙(絵)	二二・一	四八・七	二二・一	四八・七	米粉	一〇二
		軸卷	/	/	二二・六	三六・二	/	/
		本紙全長	/	/	/	二二・九・七	/	/
宿木三		縦	/	/	二二・三	/	/	/
		表紙	/	/	二二・四	二二・七	/	/
		見返し	/	/	二二・四	二二・一	/	/
		第一紙(詞書)	二二・八	二三・八	二二・九	二四・一	米粉	一〇三
		第二紙(絵)	二二・五	四九・〇	二二・五	四九・〇	米粉	一〇二
		軸卷	/	/	二二・三	三六・二	/	/
		本紙全長	/	/	/	七三・一	/	/

早 蕨	柏木一						絵合				閑屋					料紙調査													
	縦	本紙全長	軸卷	第四紙(絵)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	第三紙(絵)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)	紙繊維組成・割合(%)	填料	繊維長・その他(mm)		
				二二・九	二二・八	二二・〇	二二・七					二二・八	二二・〇	二二・四五	二二・〇	二二・〇													
				四八・三	二二・六	二二・五	二二・七					二五・七	二二・〇	二二・〇	四七・二五	二二・〇	二二・〇												
				二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・〇					二二・二	二二・二	二二・二	二二・七	二二・二	二二・二												
				三六・二	四八・九	二二・八	二二・五					二六・二	二二・四	二二・四	四八・二	二二・一	二二・五	二二・一											
				一〇〇	楮主体・雁皮わずか	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇						雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	楮六〇、雁皮四〇	楮主体、雁皮わずか	雁皮一〇〇												
					米粉	米粉	米粉入りか					米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉												
					一〇二	一〇三						一〇二			一〇二	一〇三													

東屋一					早蕨					修理前(額装)		修理後(卷子装)		料紙調査									
本紙全長	軸卷	第四紙(絵)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第三紙(絵)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)	紙繊維組成・割合(%)	填料	繊維長・その他(mm)	
/	/	二一・四	二一・八	二一・八	二一・九	/	/	/	/	/	二一・四	二一・八	二一・七	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	三九・一	二二・九	二三・六	二三・八	/	/	/	/	/	三九・二	一七・七 (内足し紙 二・二)	一四・四	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	一一・三	二一・五	二三・〇	二三・〇	二三・〇	二三・三	二二・五	二二・三	/	二二・三	二一・五	二二・一	二一・九	二二・三	二二・五	/	/	/	/	/	/	/	/
一一・〇	三六・二	三九・八	二二・〇	二四・〇	二四・二	二二・一	二二・七	二二・三	七二・八	三六・二	三九・八	一八・二 (内足し紙 二・二)	一四・八	二二・一	二二・七	/	/	/	/	楮五〇、三椶一五雁皮一〇	米粉 (足し紙・米粉)	一〇三	
/	/	楮七五、三椶二五	楮八〇、雁皮二〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	/	/	/	/	/	楮五〇、三椶一五雁皮一〇	雁皮一〇〇 (足し紙・雁皮二〇〇)	雁皮一〇〇	/	/	/	/	/	/	紙繊維組成・割合(%)	米粉	一〇三	
/	/	米粉	米粉	米粉	米粉	/	/	/	/	/	米粉	米粉 (足し紙・米粉)	米粉	/	/	/	/	/	/	紙繊維組成・割合(%)	米粉	一〇三	
/	/	一〇三	一〇三	/	/	/	/	/	/	/	一〇三	/	/	/	/	/	/	/	/	紙繊維組成・割合(%)	米粉	一〇三	

柏木三				柏木二																	
第三紙(絵)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第九紙(絵)	第八紙(詞書)	第七紙(詞書)	第六紙(詞書)	第五紙(詞書)	第四紙(詞書)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦		
																					丈(cm)
																					幅(cm)
																					丈(cm)
																					幅(cm)
																					紙繊維組成・割合(%)
																					填料
																					繊維長・その他(mm)
二・一・九	二・一・七	二・一・八	/	/	/	/	/	二・一・九	二・一・八	二・一・八	二・一・八	二・一・七	二・一・七	二・一・七	二・一・八	二・一・七	/	/	/		
四八・二	二三・五	二二・八	/	/	/	/	/	四八・五	二三・五	二三・三	二三・一	二三・八	二四・二	二三・八	二三・三	/	/	/			
二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・六	二二・八	二二・六	/	二二・六	二二・〇	二二・〇	二二・一	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・六	二二・八	二二・六		
四八・六	二三・八	二三・二	二二・一	二二・七	/	二四・八	三六・二	四九・〇	二三・八	二三・六	二三・五	二四・一	二四・二	二四・六	二四・四	二三・六	二二・一	二二・七	/		
楮一〇〇	雁皮一〇〇	楮主体、雁皮わずか	/	/	/	/	/	楮一〇〇、三桎(痕跡)	雁皮一〇〇	楮主体、雁皮、三桎わずか	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	/	/	/		
米粉	米粉	米粉	/	/	/	/	/	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	米粉	/	/	/		
一〇二	二〇三	楮二〇三	/	/	/	/	/	一〇三	二〇三	楮、雁皮 二〇三	二	二〇三	二〇三	二〇三	切断繊維	二〇三	/	/	/		

				東屋一				宿木一				柏木三																						
本紙全長	軸巻	第四紙(絵)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸巻	第三紙(絵)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸巻	修理前(額装)		修理後(卷子装)		紙繊維組成・割合(%)	料紙調査	繊維長・その他(mm)									
																			丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)												
/	/	二二・四	二二・九	二二・九	二二・九	/	/	/	/	/	二二・六	二二・九	二二・八	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
/	/	四八・一	二〇・五	二三・八	二三・七	/	/	/	/	/	三八・二	二四・〇	二四・五	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
/	二三・六	二二・五	二三・〇	二三・〇	二三・〇	二三・六	二三・八	二三・六	/	二三・六	二二・六	二三・〇	二三・一	二三・六	二三・八	二三・六	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
一一七・七	三六・二	四八・九	二〇・六	二四・二	二四・〇	二三・一	二三・七	/	八七・七	三六・二	三八・六	二四・三	二四・八	二二・一	二二・七	/	九六・五	三六・二	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
/	/	楮一〇〇、三楮(痕跡)	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	/	/	/	/	/	楮五〇、三楮五〇	雁皮一〇〇	雁皮一〇〇	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	米粉	米粉	米粉	米粉	/	/	/	/	/	米粉	米粉	米粉	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	一〇三	二	二〇三	一〇三	/	/	/	/	/	一〇二	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

橋姫		竹河一										横笛											
見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第四紙(絵)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸卷	第三紙(絵)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦				
/	/	/	/	/	二二・〇	二二・〇	二二・〇	二二・〇	/	/	/	/	/	二二・〇	二二・八	二二・八	/	/	/	丈(cm)	修理前(額装)		
/	/	/	/	/	四八・六	二二・六	二二・五	二二・九	/	/	/	/	/	三八・九	二二・五	二二・九	/	/	/	幅(cm)			
二二・八	二二・九	一三三・八	/	二二・七	二二・一	二二・一	二二・一	二二・一	二二・七	二二・八	二二・七	/	二二・七	二二・二	二二・〇	二二・〇	二二・七	二二・八	二二・七	丈(cm)	修理後(卷子装)		
二二・一	二二・七	/	一〇六・四	三六・二	二二・八	二二・〇	二四・〇	二二・四	二二・一	二二・七	/	八七・二	三六・二	三九・一	二二・九	二四・二	二二・一	二二・七	二二・七	幅(cm)			
/	/	/	/	/	楮一〇〇	雁皮九〇、楮一〇	雁皮一〇〇	雁皮九〇、楮一〇	/	/	/	/	/	楮八〇、三椶二〇	楮九〇、八〇、雁皮二〇、二〇、三椶わずか	雁皮一〇〇	/	/	/	紙繊維組成・割合(%)			
/	/	/	/	/		米粉	米粉わずか	米粉	/	/	/	/	/	米粉	米粉わずか	米粉	/	/	/	填料	料紙調査		
/	/	/	/	/	一〇三	糸目二六、二八、二九	一〇三		/	/	/	/	/	一〇二	楮二、三	/	/	/	/	繊維長・その他(mm)			

宿木二						橋姫															
本紙全長	軸巻	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	見返し	表紙	縦	本紙全長	軸巻	第四紙(絵)	第三紙(詞書)	第二紙(詞書)	第一紙(詞書)	修理前(額装)		修理後(卷子装)		紙繊維組成・割合(%)	料紙調査	填料	繊維長・その他(mm)
														丈(cm)	幅(cm)	丈(cm)	幅(cm)				
/	/	二一・五	二二・〇	二二・〇	/	/	/	/	/	二二・一	二二・〇	二一・九	二二・九	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	三八・〇	二三・〇	二四・二	/	/	/	/	/	四八・五	二二・七	二三・六	二三・九	/	/	/	/	楮六〇、雁皮四〇	米粉	一〇三	
/	/	二二・六	二二・〇	二二・〇	二二・五	二二・六	二二・五	/	/	二二・二	二二・一	二二・一	二二・二	/	/	/	/	雁皮一〇〇	米粉	一〇二	
八五・七	三六・二	三八・二	二三・一	二四・四	二二・一	二二・七	/	一一二・一	三六・二	四八・七	二四・〇	二四・〇	二四・四	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	楮九〇、三椗一〇、二〇	楮一〇〇	雁皮一〇〇、楮わずか	雁皮一〇〇、楮わずか	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	楮九〇、三椗一〇、二〇	楮一〇〇	雁皮一〇〇、楮わずか	雁皮一〇〇、楮わずか	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	楮九〇、三椗一〇、二〇	楮一〇〇	雁皮一〇〇、楮わずか	雁皮一〇〇、楮わずか	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	楮九〇、三椗一〇、二〇	楮一〇〇	雁皮一〇〇、楮わずか	雁皮一〇〇、楮わずか	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	楮九〇、三椗一〇、二〇	楮一〇〇	雁皮一〇〇、楮わずか	雁皮一〇〇、楮わずか	/	/	/	/	楮九〇、雁皮一〇	米粉	一〇二	

金 鯨 叢 書 第四十九輯 (年一回刊行)

—史学美術史論文集—

令和四年三月三十日 編集  
令和四年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一  
深 井 雅 海  
徳 川 義 崇

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一  
公益財団法人 徳川黎明会  
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一  
徳川林政史研究所  
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市中区徳川町一〇一七  
徳 川 美 術 館  
電話 (935) 六二六二番(代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五  
株式会社 思文閣出版  
印刷所  
電話 (533) 六八六〇番(代)